

創造力を高める

2025.6.4

読書を通じて語彙を蓄えるというのは脳科学的に見ても、とても大事なことである。ある実験をした方がいる。いわゆるクリエイティビティ、何か新しいものを創り出す創造性は、脳のどこから生まれてくるのかを調べた。そうしたら、語彙を格納する部位と言葉を扱う部位が一番よく働いていた。それは言葉ではなく、イメージを膨らませて何かを生み出すときもそうである。したがって、新しいものを創造する高次な活動も、すべてその人の語彙がもとになっている。これは、湯川秀樹博士の「創造性の発現には相当大量の語彙の蓄積が必要だ」という言葉に通じる。

ある会社に、ある企業から、ホワイトカラーの創造性を伸ばしてほしいという依頼があった。言われたことしかできない社員を何とかしてほしいと。そこで、その会社の担当者は、文庫本を2冊渡すことにした。これを1か月後までに読んでおいてくださいと。

1か月後に実験すると、ちゃんと読んでくれた社員さんは、見事にクリエイティビティが上がっていた。そのまま読書が習慣になり、課題の本以外も読んできた人は、もっとその伸びが顕著だった。その一方で、さぼった社員さんは横ばいのままだった。

クリエイティビティというのは、まさに語彙力である。文章を読み、扱うところの脳から出てくるものである。まず読書をすることで、クリエイティビティが高まる。そのうえ、普段使わない語彙が使われている少し古い本を読むとなおよい。ただし、明治や大正の文語文は、今の若い人には辛いので、口語に近い作品のほうがよい。

“エチ先生”のことを思い出した。伝説の灘校国語教師である橋本武先生のことである。エチ先生は、戦後、公立校のすべり止めだった灘校で、文庫本『銀の匙』だけを3年間かけて読むという空前絶後の授業を始める。明治の虚弱な少年の成長物語を、横道にそれながら丁寧に追体験していく。五感や季節感を大切にしながら進められるエチ先生の授業は、生徒の興味でどこまでも脱線していく、生徒たちは自分や友人の個性に気づいていく。

なにゆえに『銀の匙』なのか。橋本武先生は、教材として『銀の匙』を選んだ理由を挙げている。主人公が十代の少年であるため生徒たちが自分を重ね合わせて読みやすい、夏目漱石が絶賛したほど日本語が美しい、明治期の日本を緻密に描いているため時代や風俗考証の対象にしやすい、新聞連載であったため各章が短く授業で取り扱いやすい、やや散文的に書かれているため寄り道しやすいといった点である。

大きな期待を抱きながら『銀の匙』を読んだことがある。正直申し上げて、おもしろいものではなかった。平板なお話だった。エチ先生の『銀の匙』の卒業生にはなれなかったが、自分の中に、一生学び続ける好奇心や創造力の萌芽ぐらいは生まれたのかもしれない。